

中臣遺跡発掘調査概報

昭和59年度

京 都 市 文 化 観 光 局

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

平安京建都以来、約 1200 年にわたって我が国の政治、経済、文化の中心として栄えてきた京都は、数多くのすぐれた文化遺産を有しています。

このような、文化遺産を土台としながら、京都は 21 世紀に向かって新しい文化を創造し続ける活力ある都市を目ざして、発展を図っていかねばなりません。

このような中であって、埋蔵文化財の果たす役割も重要なものがあります。

このため、本市では埋蔵文化財の保存を図るとともに、保存し難い遺跡については、調査を行い、その成果をできる限り、後世に伝えるよう努めております。

この調査概報は、昭和 59 年度国庫補助事業として実施した発掘調査の結果をまとめたものでありますが、本書が、埋蔵文化財の研究や学習に広く活用していただければ幸いです。

本調査の実施に当たり、調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、又御指導いただいた文化庁をはじめ御協力をいただいた関係各位並びに市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和 60 年 3 月

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、昭和59年度文化庁国庫補助事業における中臣遺跡発掘調査の概報である。
- 2 発掘調査は、京都市文化観光局が財団法人 京都市埋蔵文化財研究所に委託し、同研究所がこれを実施した。
- 3 発掘調査は2箇所実施した。調査次数は59次・60次調査である。
- 4 図中に使用した方位・座標は、新平面直角座標系（VI）による。
- 5 標高は海拔高 T.P. を使用した。
- 6 本書中の地図は、京都市の承認を得て、京都市計画局発行都市設計基本図（2500分の1）・勸修寺を修正して使用した。
- 7 本書中の写真は、遺構・遺物とも牛嶋 茂が撮影した。
- 8 本書の執筆・編集は、菅田 薫・辻 純一が担当した。

本文目次

I	59次調査	1
	1 調査経過	1
	2 遺構	1
	3 遺物	3
	4 まとめ	4
II	60次調査	5
	1 調査経過	5
	2 遺構・遺物	5
	3 まとめ	10

図版目次

図版一	遺跡	調査位置図		
図版二	遺跡	59次・60次調査区周辺主要遺構位置図		
図版三	遺跡	59次調査全体図		
図版四	遺跡	古墳平面図		
図版五	遺跡	60次調査全体図		
図版六	遺跡	航空写真		
図版七	遺跡	1 59次調査掘立柱建物群	2	S B 4
図版八	遺跡	1 S B 1	2	S K 109全景
図版九	遺跡	1 古墳全景	2 周溝遺物出土状況	3 主体部
図版十	遺跡	60次調査全景		
図版十一	遺跡	1 1号住居址・2号住居址	2	1号住居址全景
図版十二	遺跡	1 2号住居址全景	2	2号住居址カマド
図版十三	遺跡	1 3号住居址全景	2	3号住居址カマド
図版十四	遺跡	1 S K 76全景	2	掘立柱建物
図版十五	遺物	古墳周溝出土土器		

挿図目次

図 1	S K 109	2	図 6	2号住居址カマド	6
図 2	S K 190	2	図 7	2号住居址	7
図 3	古墳周溝出土土器	3	図 8	2号住居址出土土器	7
図 4	S K 109出土土器	4	図 9	3号住居址	8
図 5	1号住居址	5	図10	3号住居址カマド	9

I 59 次 調 査

1 調査経過

山科区西野山中臣町 58 A・59・70 A に所在する宅地開発予定地の事前調査である。

本調査地は栗栖野丘陵の西端に位置し、調査地の南側の水田面とは現地表で約 1 m の比高差があり、西南に流れる旧安祥寺川に向い低位段丘となっている。

今次調査区周辺における既往の調査は、昭和 46 年度の 1 次調査以降 3 次・5 次・7 次・44 次調査等が実施されている。その結果、栗栖野丘陵西南縁辺部では弥生時代中期の土坑（1 次・44 次）・方形周溝墓（1 次）、古墳時代後期の古墳（1 次）・竪穴住居址（5 次・7 次・14 次）、平安時代の掘立柱建物（44 次）等を検出している。今回の調査地は、5 次調査の市街化道路の南、7 次調査の西側に位置し、その調査成果から古墳時代後期頃の竪穴住居址、平安時代のピット等の検出が予想された。

調査は調査対象地ほぼ全域にわたって実施、調査面積は 682 m² である。昭和 59 年 4 月 16 日より開始、同年 6 月 2 日終了した。

2 遺構

基本層序は耕土・床土が 30～70 cm あり、調査区の北側 3 分の 1 ではその直下に東側で黄褐色泥土層、西側で砂礫層の無遺物層となる。南側では黒褐色砂泥層が南に向って漸次厚く堆積している。この層の下に無遺物の褐灰色泥土層が堆積し以下黄褐色泥土層・砂礫層となる。黒褐色砂泥層からは弥生時代後期から平安時代の遺物が出土している。遺構は褐灰色泥土層・黄褐色泥土層・砂礫層の面で検出された。検出した主な遺構は掘立柱建物・土坑・溝・古墳周溝等がある。

古墳 調査区西部で検出。石室基底部の痕跡と思われる落ち込みと周溝を確認した。溝の西側は平安時代以降の削平のため墳丘側の肩部のみを検出。また溝の北側は 5 次調査時に検出している。溝は一周せず南東部で陸橋状に途切れ、石室も基底部の痕跡を残すだけであるが 5 次調査成果とあわせて古墳と判断した。復元径 13～14 m の円墳と推定される。

溝（S D 2・S D 161）は上幅 1.2～1.8 m・深さ 0.3～0.6 m で南東部が陸橋状に途切れる。

石室は基底部の痕跡と思われる落ち込み（S X 200）から復元して両袖式の横穴式石室と考えられる。玄室の幅 1.4 m・長さ 2.7 m、羨道の幅 0.9 m・長さ 2.4 m の規模をもつものと思われる。方向は真南北に対して 25 度西に振れる。この石室基底部と考えられる落ち込みからは石室の石材と思われるチャートの剥片が多量に出土している。

周溝SD 2・SD 161の間より南東に向けて溝（SD 164）が検出された。上幅60cm・深さ30~40cmのU字溝で、出土遺物がなく時期は不明であるが、石室の主軸の延長線上にあり、SD 2・SD 161と同質の埋土であることなど、排水溝等の古墳に伴う溝と思われる。遺物はSD 2・SD 161より須恵器杯・高杯・短頸壺・長頸壺等が出土している。

土坑 四隅に柱穴状のピットを有す土坑を2基検出した。SK 109は平面方形を呈し、規模は東西1.9m、南北2.2m、深さ0.25mである。埋土は黒褐色砂泥層で床面には焼土・炭の層が薄く堆積している。ピットは壁中より掘り込まれ、柱間はP₁より右廻りで1.5・1.45・1.5・1.13mを測る。

SK 190は東西1.6m・南北1.7m・深さ0.2mでSK 109に比べ小型である。柱間はP₁より右廻りで1.3・1.3・1.3・1.2mを測る。埋土の状況他はSK 109と同じであった。両土坑ともに炉・壁溝等の竪穴住居址としての施設は検出されなかった。

出土遺物はSK 109・190ともに少なく、平安時代前期の土師器・須恵器が出土している。

掘立柱建物 掘立柱建物は4棟確認した。検出したピットの規模・掘形・北接する市街化道路での調査成果等を考慮すると4棟以上の建物になると思われるが、ここでは確実な建物だけを取り上げた。

SB 1 2間×2間の総柱建物。真南北に対して東に振れる。柱間は北の柱穴より右廻りで1.8・1.6・1.7・1.7・1.7・1.7・1.8・1.8mである。中央の柱穴は若干西に振れた位置にある。掘形は円形と方形がある。

SB 2 2間×3間の南北建物で、ほぼ真南北の方向をもつ。柱間は東西、南北ともに1.8mの等間で

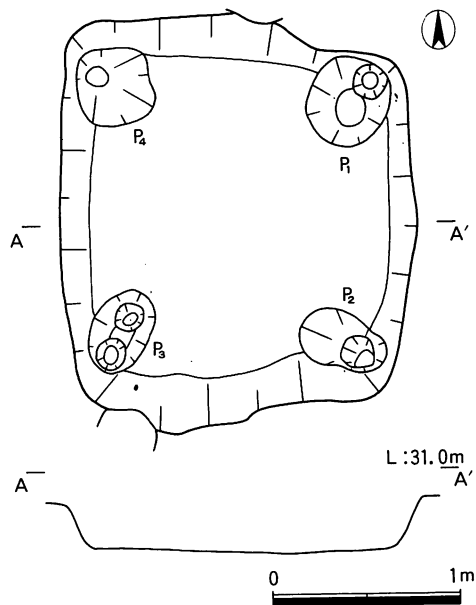


図1 SK 109

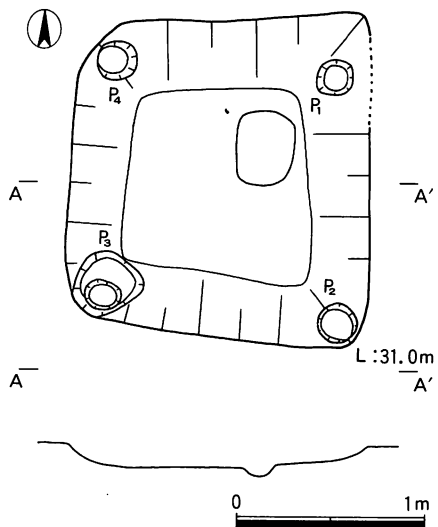


図2 SK 190

あり、掘形には、円形のものと同方形のものがある。

S B 3 2間×3間の南北建物。真南北に対して、東に振れている。柱間は東西2.1m、南北2.4mである。掘形はすべて一辺0.8~1.0mの方形を呈す。

S B 4 2間×2間の建物。総柱とも思われるが中央の柱穴は確認できなかった。柱間は1.8mの等間であるがゆがんでいる。掘形は円形。

3 遺物

遺物は各遺構および黒褐色砂泥層より弥生土器・土師器・須恵器等が整理箱に14箱出土している。これらの遺物は弥生時代後期から平安時代までのものであるが、ここでは、古墳周溝出土の遺物と、S K 109出土の遺物を図示した。

須恵器蓋 (1~4) はS D 2, (10・11) はS D 161出土。すべて天井部は全体に丸味をもって仕上げ、2分の1をヘラケズリしている。天井内面は仕上げナデを施している。

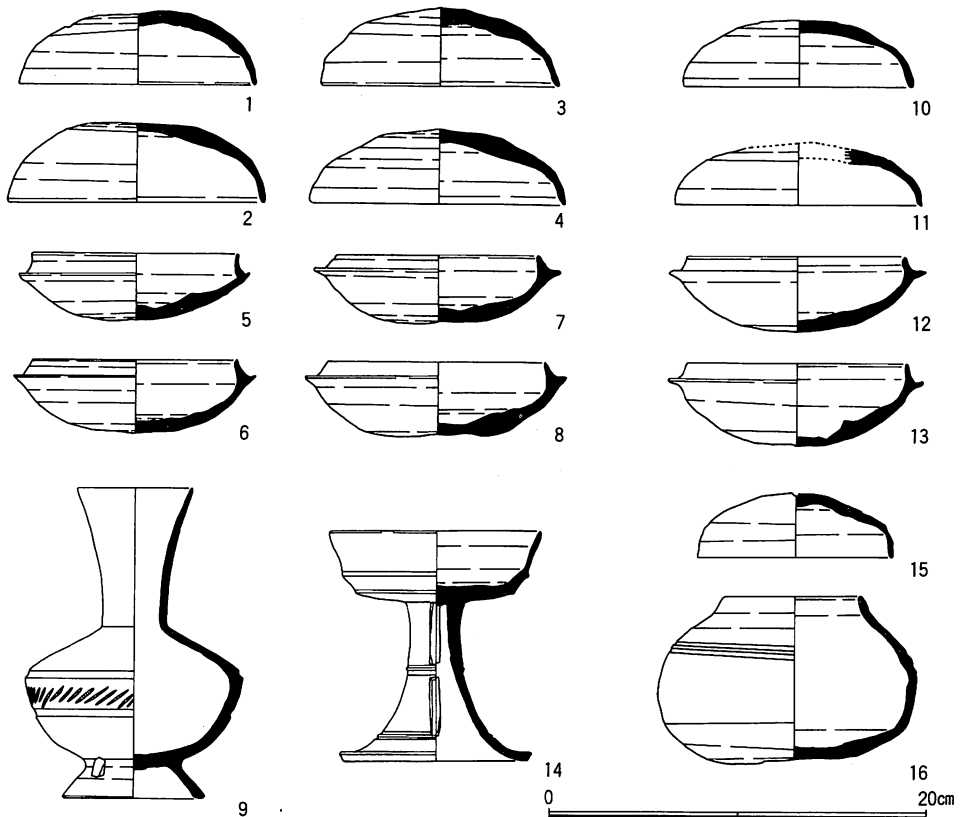


図3 古墳周溝出土土器

(1) 口径 12.6・器高 3.9 cm, (2) 口径 12.6・器高 4.1 cm, (3) 口径 13.6・器高 4.2 cm, (4) 口径 13.5・器高 3.9 cm, (10) 口径 12.2・器高 3.5 cm, (11) 口径 13.0 cm・器高不明, (15) は S D 2 出土。ヘラケズリはなく, ヨコナデによる調整

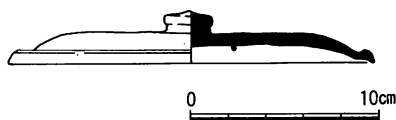


図 4 S K 109 出土土器

で天井部内面に仕上げナデを施す。短頸壺 (16) とセットで出土する。口径 10.3・器高 3.5 cm。

杯 (5~8) は S D 2, (12・13) は S D 161 出土。(5) はたちあがり内傾し, 端部は丸く外反するようにおさめ, 受け部は短い。(6~8・12・13) はたちあがり低く内傾し, 端部を丸くおさめている。(5) の底部外面はヘラ切りのまま未調整である。(6~8・12・13) は底部外面 3 分の 1 ほどを粗いヘラケズリを施している。(5) 口径 11.0・器高 3.6 cm, (6) 口径 10.7・器高 3.6 cm, (7) 口径 10.8・器高 3.9 cm, (8) 口径 11.5・器高 3.9 cm, (6) 口径 11.4・器高 4.9 cm, (13) 口径 11.6・器高 4.4 cm。

高杯 (14) は S D 161 出土。長脚 2 段透しの無蓋高杯で, 透しは 2 方向である。口径 11.1・器高 12.3 cm。

長頸壺 (9) は S D 2 出土。最大径は 11.6 cm で肩部にある。肩部と胴部に凹線があり, その間に列点文を配している。口径 6.1・器高 16.6 cm。

短頸壺 (16) は S D 161 出土。最大径は胴部にあり 13.6 cm, その上部に 2 条の浅い凹線をめぐらしている。底部はヘラケズリしている。口径 7.2・器高 9.0 cm。

S K 109 出土の土器 (図 4) 宝珠つまみのつく蓋である。天井部内面に仕上げナデ, 他はヨコナデを施す。口径 19.7・器高 2.75 cm。

4 まとめ

検出された主な遺構の年代は, 古墳が周溝出土の須恵器から 6 世紀末葉, 土塚 S K 109・190 が平安時代に比定できる。掘立柱建物は出土遺構が極めて少なく出土遺物からは判断できないが, 上位を覆う包含層の出土遺物から平安時代前期までに推定できる。

今次調査では古墳を 1 基検出したが, 中臣遺跡群の中でもこれまで漠然としていた「中臣十三塚」の復元に重要な成果を得た。

II 60 次 調 査

1 調査経過

調査地は山科区勸修寺西金ヶ崎 96・97・98 番地に所在する。当地の宅地開発に伴い、事前に発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から南西に広がる低位段丘の末端に位置し、旧安祥寺川に接する水田である。

当該地周辺における既往の調査は昭和 48 年の 2 次調査以降、3 次・8 次・35 次・52 次・55 次調査等が実施されている。それらの調査結果では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居址・土壇等、古墳時代後期の竪穴住居址・掘立柱建物・土壇・溝等の遺構が周辺一帯で検出されている。

調査面積は 2050 m²あり、ほぼ対象地全域にわたって調査を実施した。現水田面の高さは標高 29.3 m。

調査は、昭和 59 年 6 月 5 日より開始、耕土および旧安祥寺川旧河道の上層を重機により掘削・搬出した。同年 8 月 日一部埋め戻しを行ない調査を終了している。

2 遺構・遺物

調査区の基本層序は耕土・床土および盛土が調査区北東部で 30 cm、南西部で 70 cm の厚さである。調査区北西部では床土直下が遺構面であり無遺物層の黄褐色泥土層となり、東南部では褐灰色砂泥層が堆積している。この褐灰色砂泥層は南に向かって漸次厚く堆積している。褐灰色砂泥層からは弥生土器（後期）、古墳時代前期の土師

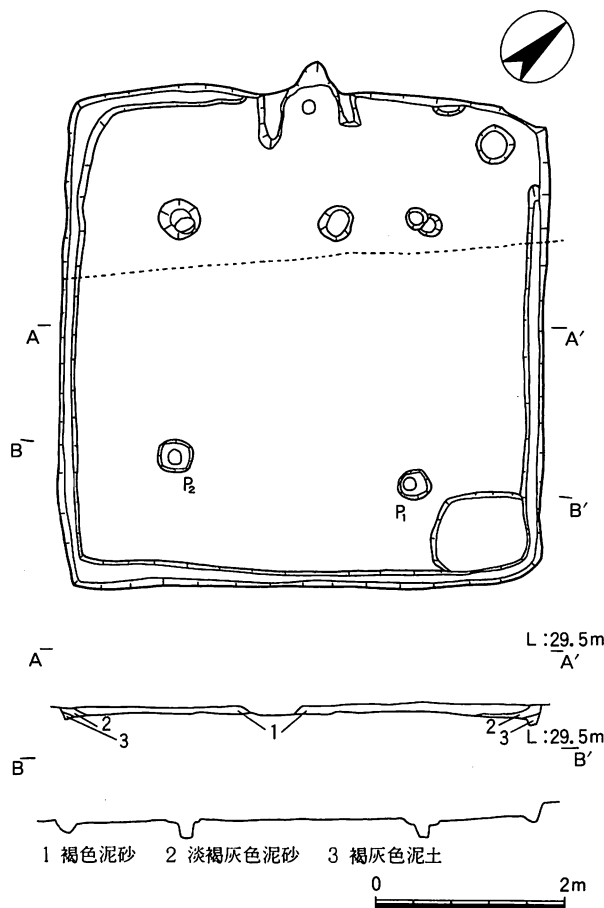


図 5 1号住居址

器が出土している。

遺構は黄褐色泥土面で検出している。検出した主な遺構には弥生時代後期の土壇、古墳時代後期の竪穴住居址・土壇・溝、時期不明の掘立柱建物等があり、その他にピット多数が検出されている。

遺物はS D 17, S K 76を中心に各遺構および褐灰色砂泥層から、弥生土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器・須恵器および石包丁・石鏃が遺物整理箱に17箱出土している。

1号住居址 調査区西端で検出した。2次調査10号住居址と同一の住居址であり⁽¹⁾、今回東側3分の2を調査す

る。平面形は方形を呈し、検出面での規模は長軸が5.7m、短軸5.0m⁽²⁾、床面までの深さ約10cmである。壁溝は上巾10~15cm、床面からの深さ4~6cmで北コーナー部をのぞき全周する。柱穴は2本検出され、2次調査分とあわせて4本柱となる。深さは10~15cmで柱間はP₁、P₂間で2.65mある。東コーナー部には貯蔵穴と思われる土壇がある。平面方形で長軸100cm、短軸80cm、深さ25cmである。カマドは2次調査で調査されており、西北壁中央部に付設している。燃烧部中央に須恵器高杯を倒立させ支脚としている⁽³⁾。

今回の調査では遺物は少なく、埋土中より土師器甕片が出土している。

2号住居址 2次調査9号住居址に相当する。北西壁の南側およびカマド燃烧部・煙道部は2次調査時に調査。2次調査8号住居址と重複関係にあり、この住居址が新しい。平面形は方形を呈すが、北西壁はやや胴張りになっており、北・西のコーナーも丸くなっている。検出面での規模は長軸6m、短軸5.5m、床面までの深さ15cmある。壁溝は東北壁・南西壁に部分的に検出されている。床面は貼床は認められないが、カマド付近から住居址中央部にかけて非常に硬くふみしめられている。柱穴は4本確認でき、P₁より右回りで、1.90・1.90・2.00・2.00mの柱間を測る。北西壁中央部にカマドを構築している。燃烧部中央付近から煙道部にかけては2次調査で調査を実施しており、燃烧部中央に支石を付

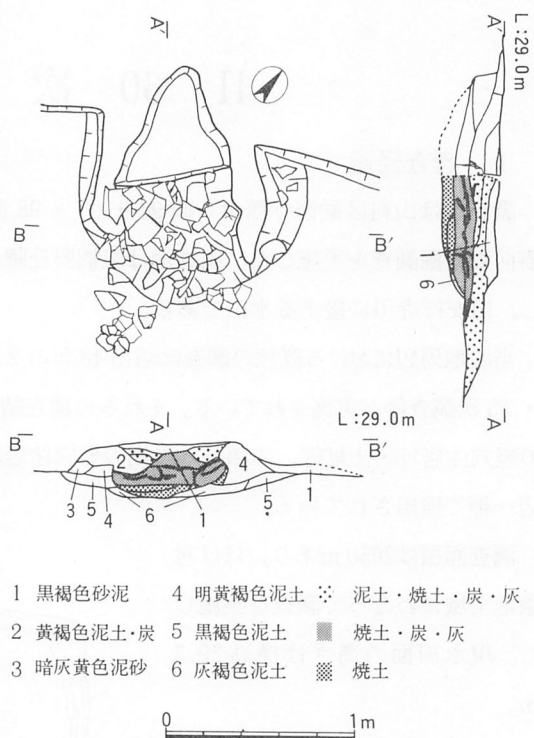


図6 2号住居址カマド

設している⁽⁴⁾。今回は焚口部と袖部を調査。焚口部内巾 105 cm, 焚口部から煙道部間は約 140 cm, 床面から燃焼部底まで約 20 cm ある。袖部および燃焼部・焚口部の上部は押しつぶされた状態であり, 土師器長甕・甕・甔が出土している。

出土遺物は少ないがカマドより土師器甕, 床面より須恵器蓋 (図 8-1), 高杯脚部 (同一-2) が出土している。(1) は径 13.4・器高 3.9 cm で天井部を幅狭くヘラケズリしている。(2) は長脚 2 段透し高杯の脚部で裾部径 10.2 cm。透しは 2 方向である。

3号住居址 3次調査の12号住居址に相当する。調査区の東隅で検出。3次調査では北東コーナー部を検出しており, 本調査によってこの住居址の全容を明らかにすることができた。平面は正方形を呈し, 検出面での規模は一辺 6.8 m。床までの深さ 16~20 cm を測る。壁溝はカマドの北側を除いて全周しており, 上幅 18~20 cm, 床面からの深さ 5~8 cm ある。柱穴は 4 本確認され, 径 25~30 cm, 深さ約 30 cm である。柱間

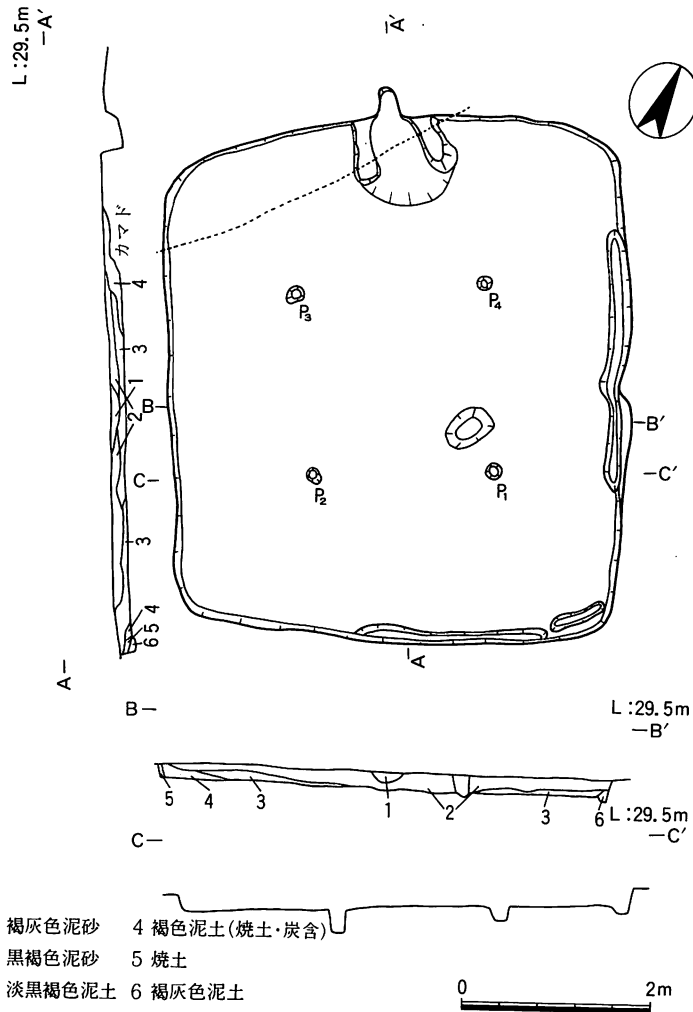


図 7 2号住居址

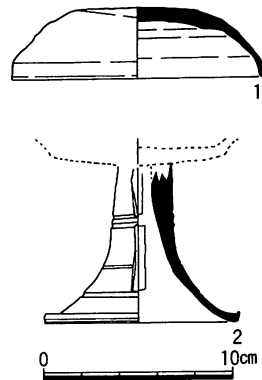


図 8 2号住居址出土土器

はP₁より右回りで3.25・3.30・3.20・3.15 mある。西壁中央部にカマドを付設している。上部は押しつぶされているが比較的残存状態の良好なカマドである。焚口部の幅55 cm, 袖頂部から燃焼部底までの深さ28 cm, 焚口部から煙道部までの長さ170 cmを測る。燃焼部付近の袖部内面は良く焼けしまっている。燃焼部中央に支石を設けており, これも焼けて表面が剝脱している。

出土遺物は極めて少なく, 埋土中より土師器・須恵器の小破片が出土している。

その他の遺構 3棟の竪穴住居址の他, 土壇・溝・掘立柱建物1棟などを検出している。

S K 76 調査区東部で検出した弥生時代後期の土壇である。長径2.5 m, 短径2.0 m, 深さ60 cmを測り, スリ鉢状の底部を呈す。埋土は黒褐色泥砂層で弥生時代後期の壺・甕・

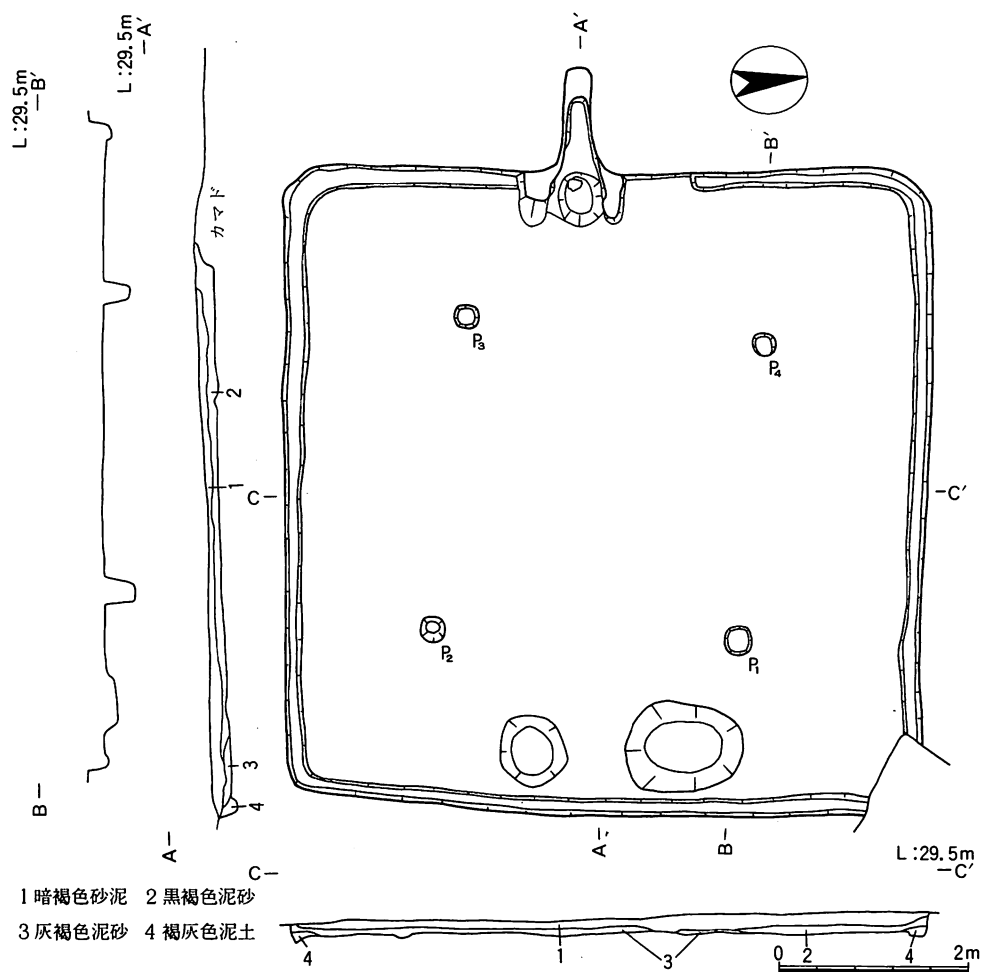


図9 3号住居址

鉢・高杯・長頸壺等が出土している。

S K 16 調査区北側で検出された土壇・東西 m・南北 mを測る。当初、竪穴住居址と考えたが、床・柱穴・壁溝・カマドなど竪穴住居址としての施設がなく、壁面も斜めになり竪穴住居址にはならないものと判断した。6世紀後半から7世紀初頭の須恵器・土師器が出土している。

S D 17・18 S D 17は調査区を北北西から南東に向けて検出された溝である。2次・3次調査の溝B, 55次調査のS D 1に相当する。S K 16と重複し, S K 16が新しい。幅3.4~4.5 m, 深さ45~60 cmあり, 溝の断面はU字形を呈している。埋土は大きく2層に分層でき上層からは6世紀後半から7世紀初頭の土師器・須恵器が, 下層からは6世紀中葉の土師器・須恵器および, 弥生土器, 石包丁・石鏃が出土している。

S D 18はS D 17中央部よりやや北よりでS D 17から分流する溝と思われる。埋土はS D 17の上層である暗黄褐色泥砂層と同一層である。幅約2.0 m, 深さ30 cmで南部は旧安祥寺川旧河道によって削られている。出土遺物は少ないが, 6世紀後半から7世紀初頭の土師器・須恵器と弥生土器が出土している。

S B 1 調査区の中央部で検出。真南北に対して東に大きく振れる。2間×2間以上で

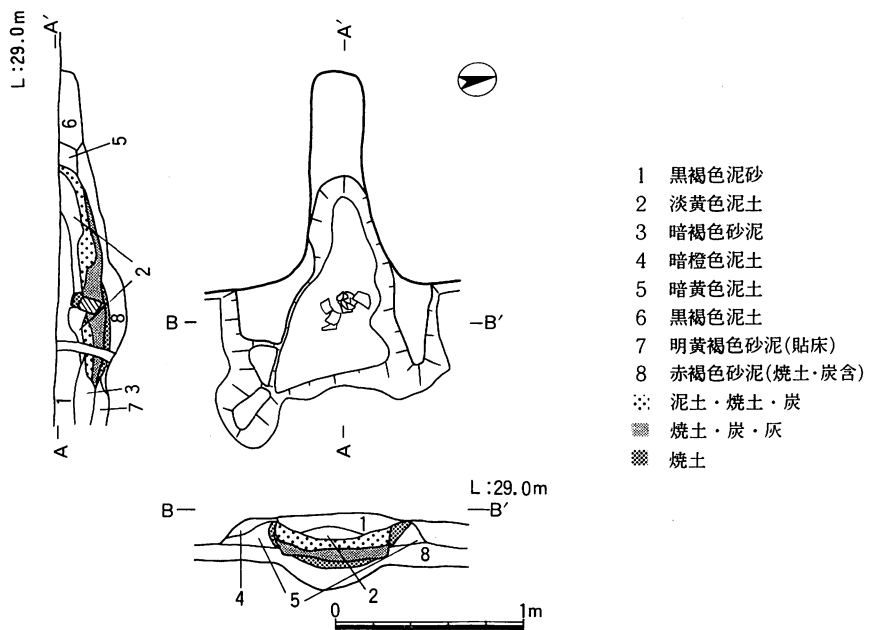


図10 3号住居址

南西部は旧安祥寺川旧河道により削られている。規模は3.6 m (1.8 m・1.8 m) ×4.8 m 以上 (2.4 m・2.4 m)。掘形等からの出土遺物が少なく小破片のため時期は不明。

3 まとめ

今回調査した竪穴住居址3棟は2次・3次調査で確認されていたものであり、新たな竪穴住居址の検出はなかった。主な遺構の時期は1号住居址が2次調査におけるカマド支柱の須恵器高杯から6～7世紀、また2・3号住居址も床面・カマド内出土の遺物から6～7世紀である。この他に6～7世紀の遺構はSD 17・18, SK 16等がある。他にSK 76が3～4世紀に比定される。

- 註 1) 『中臣遺跡』 京都市埋蔵文化財年次報告1974—III 中臣遺跡調査団 1975年
- 2) 竪穴住居址の規模は、2次・3次調査の平面図と照合させた図面上での復元長である。2号住居址の規模およびカマド断面図も2次調査の図面と合せたものである。尚、昭和57年度『中臣遺跡発掘調査概要』京都市埋蔵文化財研究所収所の図版二「52次調査区周辺主要遺構位置図」および昭和58年度『中臣遺跡発掘調査概要』京都市埋蔵文化財研究所収所の図版二「55次調査区周辺主要遺構位置図」では、当該住居址の位置と規模があやまって記載されており証正する。
- 3) 註1 図版三一17の高杯
- 4) 註1 図版十一・8・9号住居址

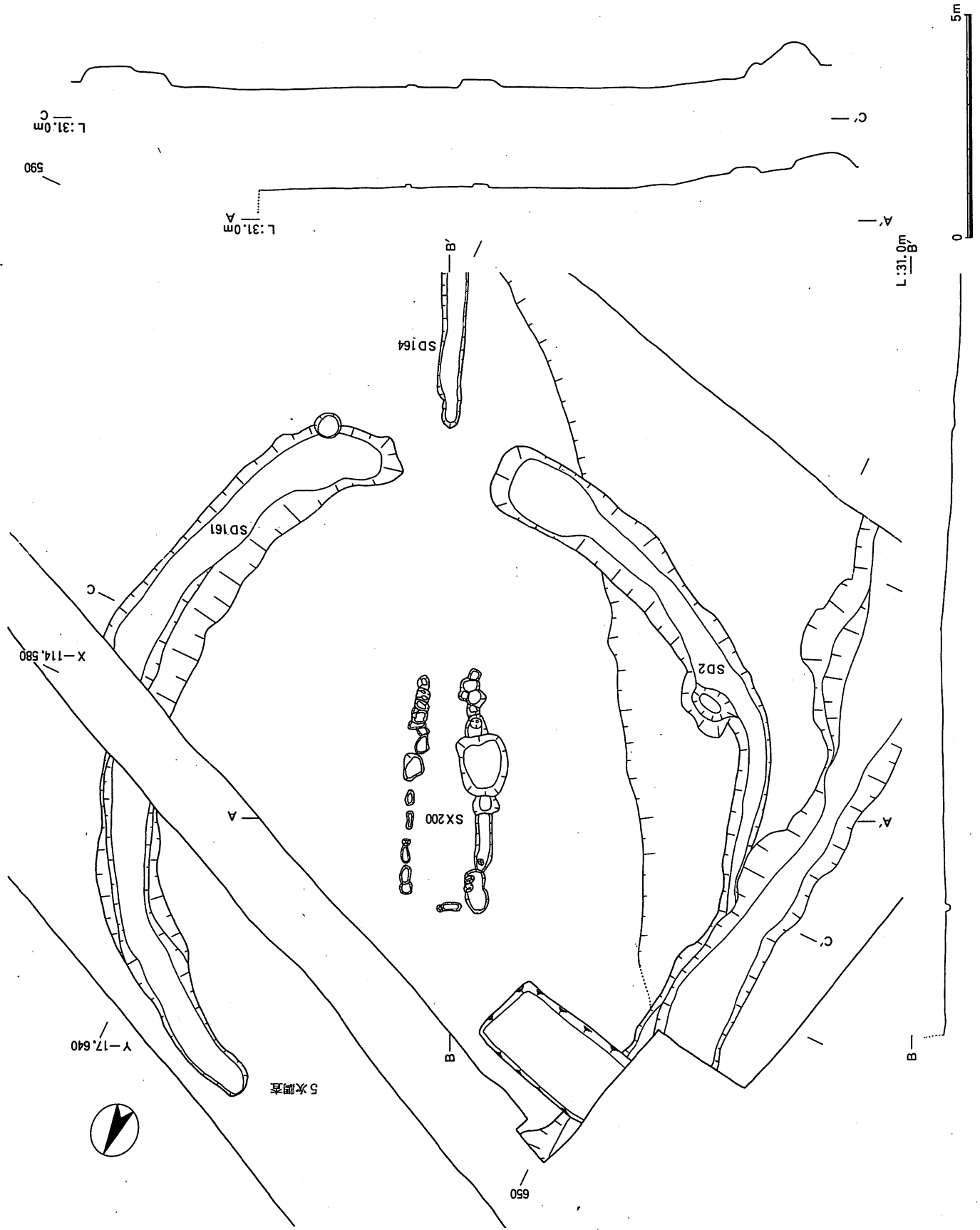
图 版



59次・60次調査区周辺主要遺構位置図

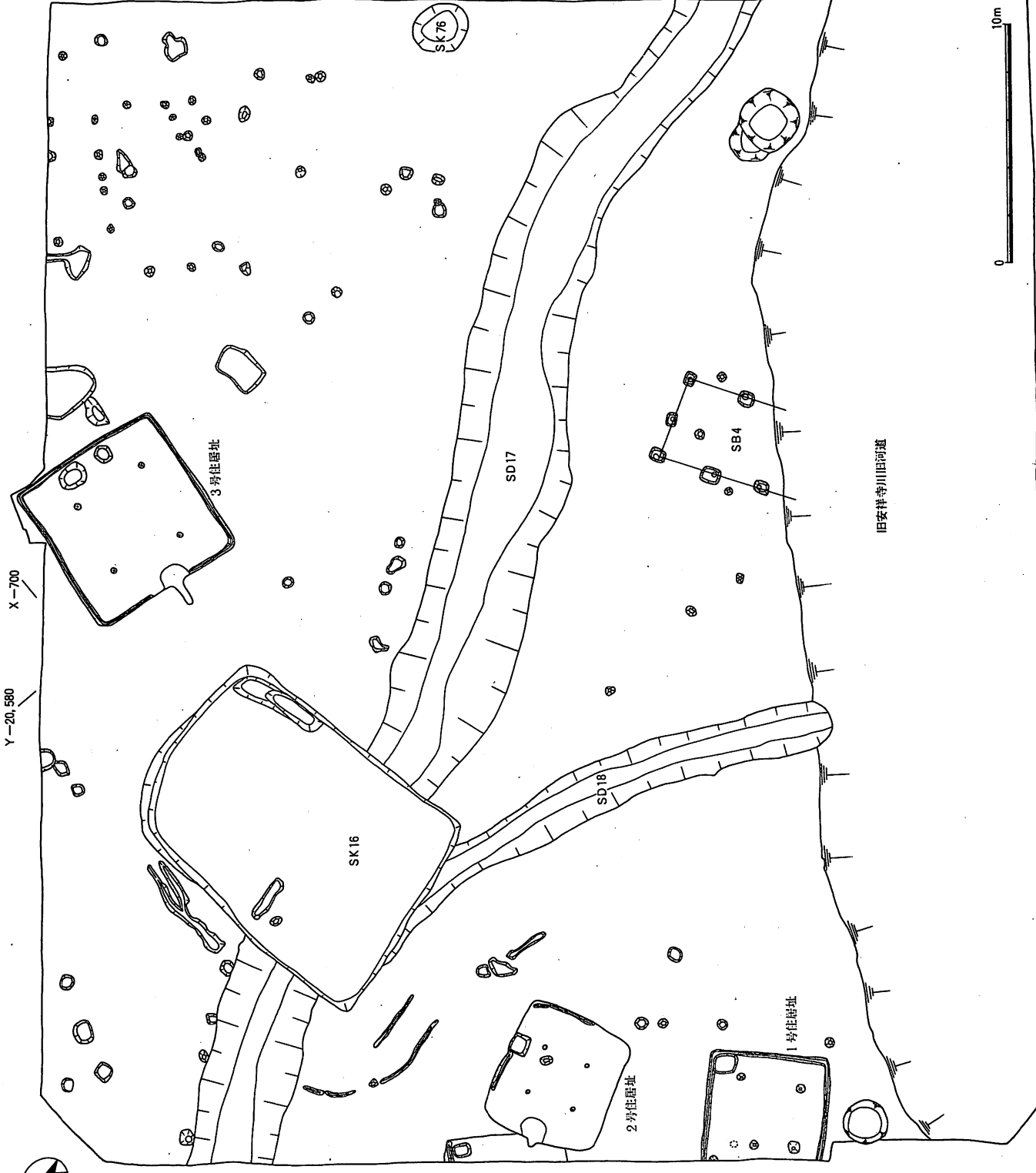


59次調査全体図

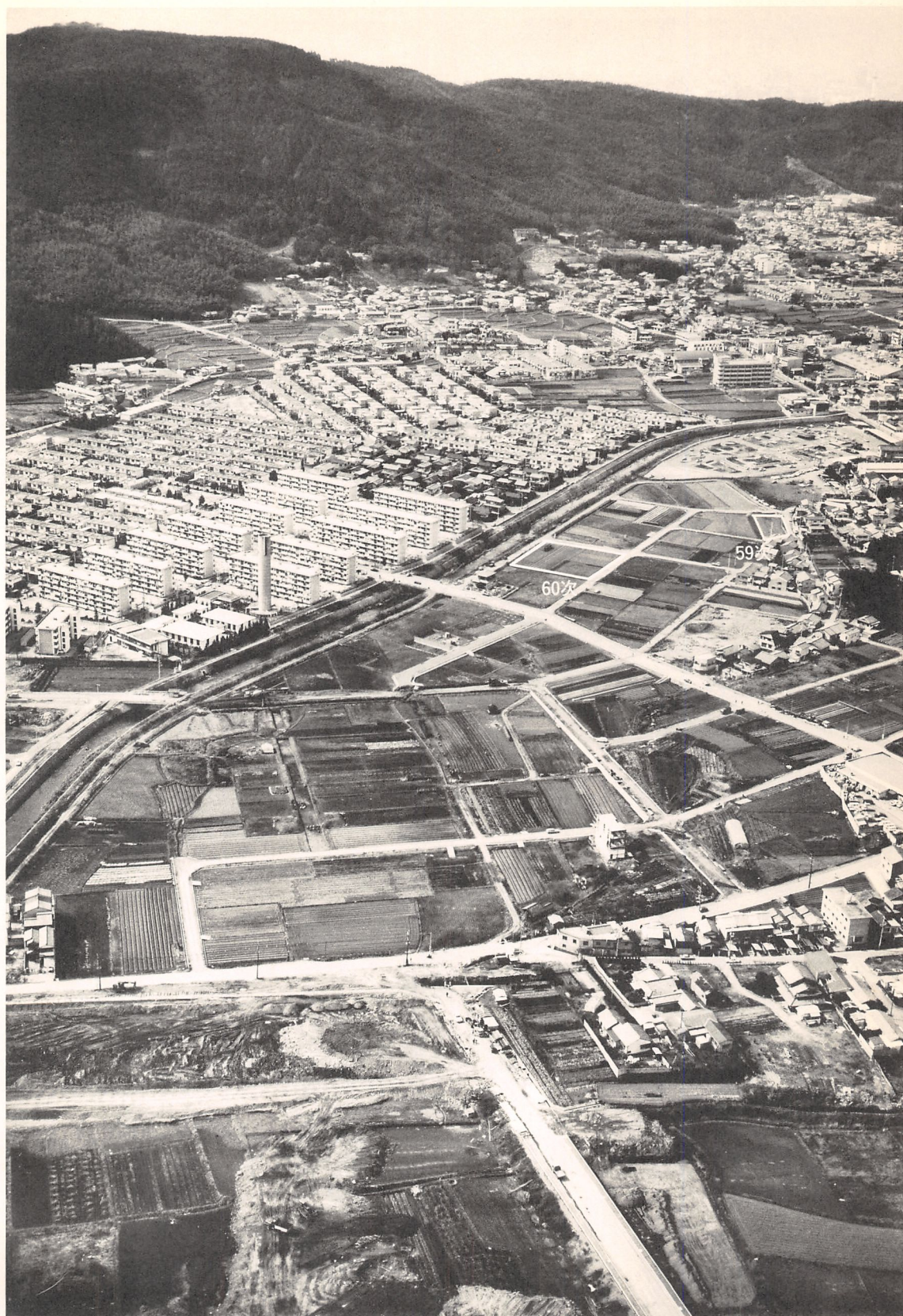


X-114,720

X-740



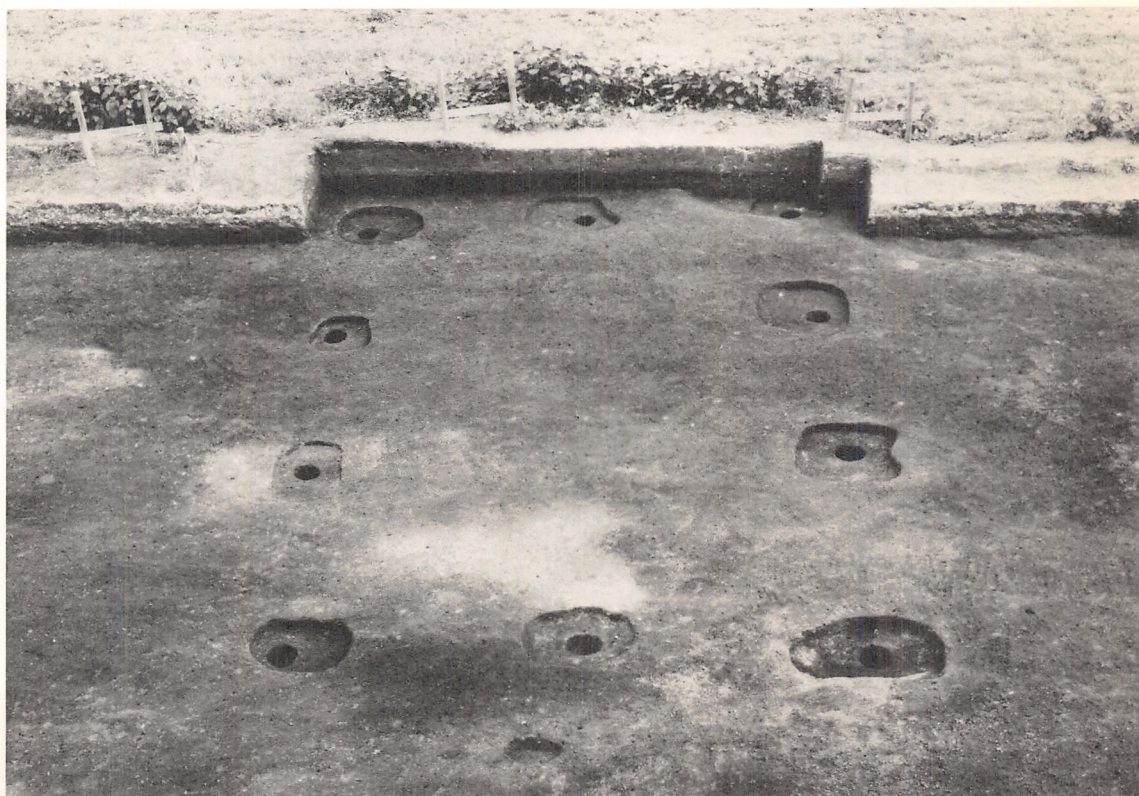
60次調査全体図



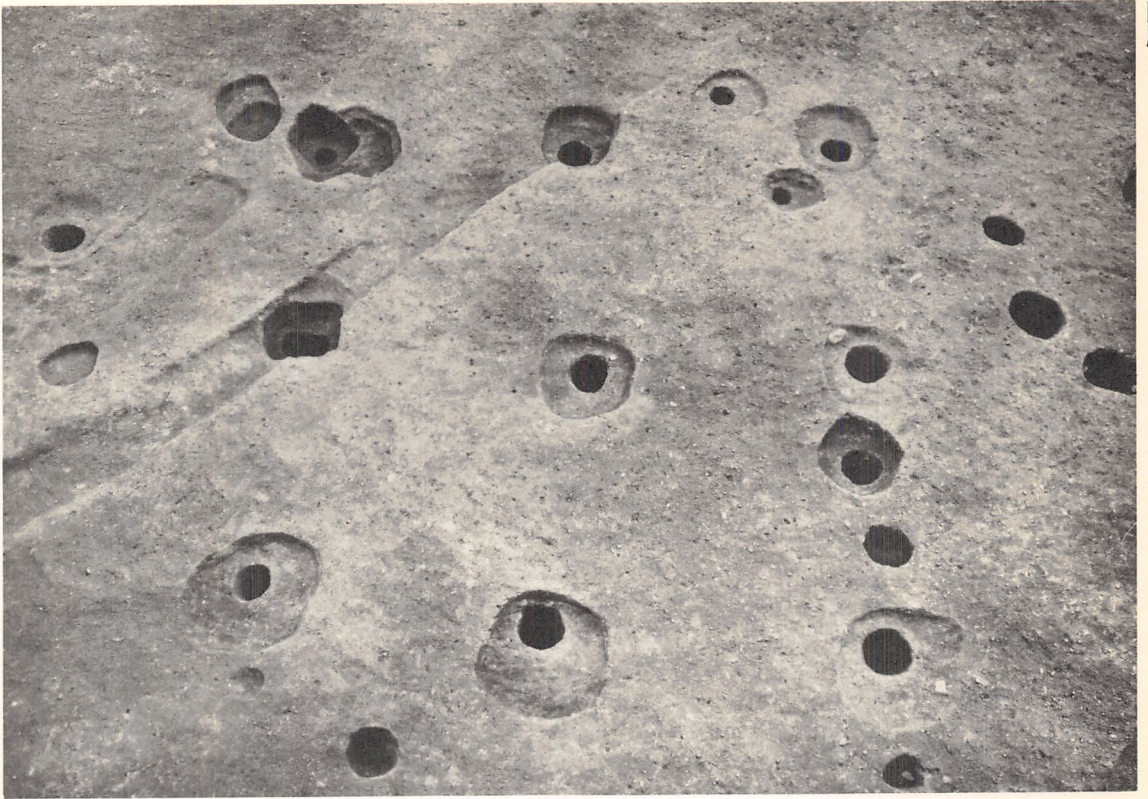
航空写真 (昭和52年撮影)



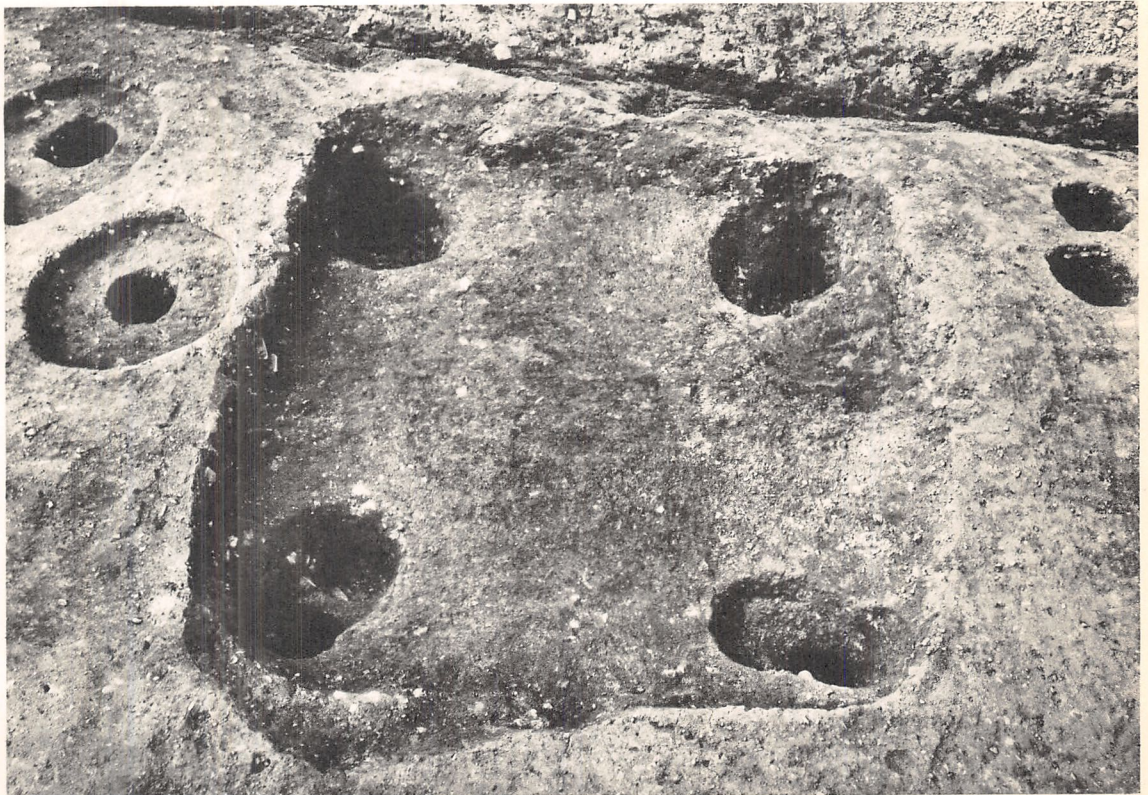
1 59次調査掘立柱建物群（西から）



2 SB4（北から）



1 SB1 (東から)



2 SK109 (南から)



1 調査古墳全景（南から）



2 周溝遺物出土状況



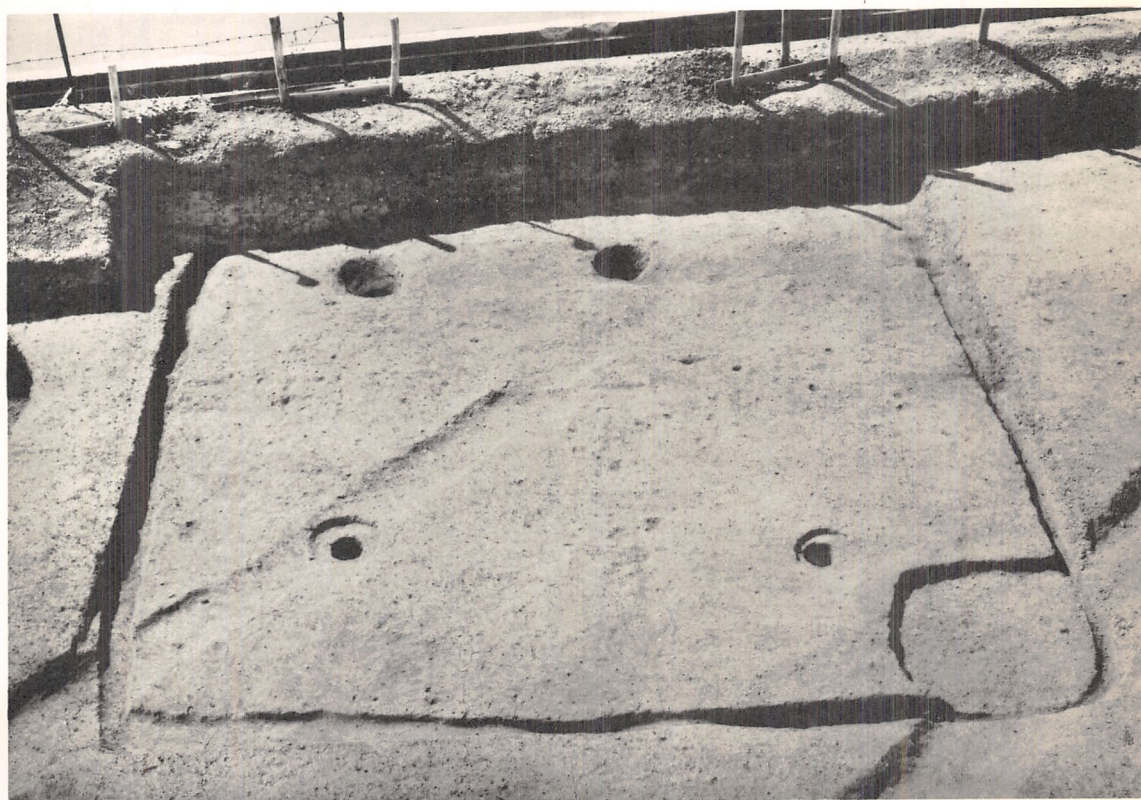
3 主体部



60次調査全景（西から）



1 1号住居址・2号住居址（東から）



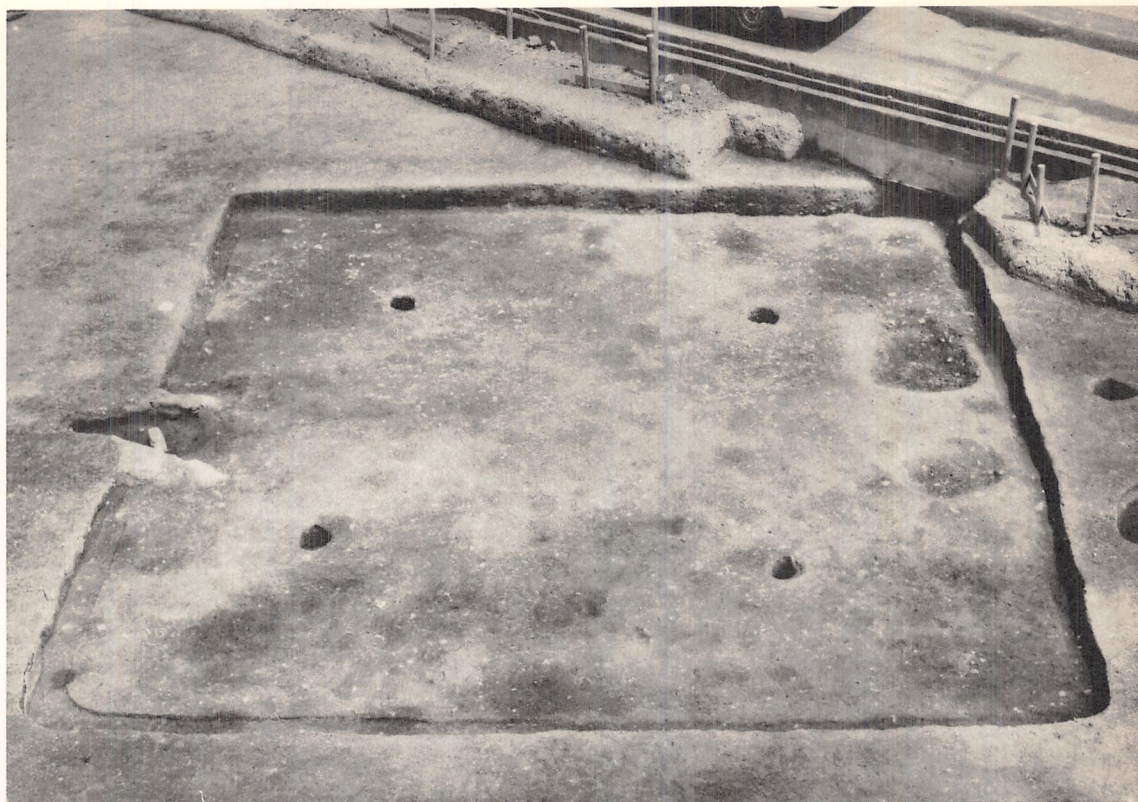
2 1号住居址全景（南から）



1 2号住居址全景（南から）



2 2号住居址カマド



1 3号住居址全景（南から）



2 3号住居址カマド



1 S K76 (北から)



2 掘立柱建物 (北から)



中臣遺跡発掘調査概報

昭和59年度

発行日 昭和60年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415-0521

印刷 真 陽 社